

デーリー東北

2025年(令和7年)6月30日(月曜日) (3)

八戸工業大感性デザイン学部・戴研究室「アートマネジメント」

最前線 研究室の挑戦

映像通じた地域活性化模索

デジタルアーカイブも軸

◆八戸工業大感性デザイン学部感性デザイン学科「戴研究室」今年4月開設。映像編集や演出の方法論、脚本、絵コンテの描き方など、映像制作の技術や現場の知識を伝えながら、映画や映像を中心とした芸術文化発展のため方法論の研究や実践を行っている。

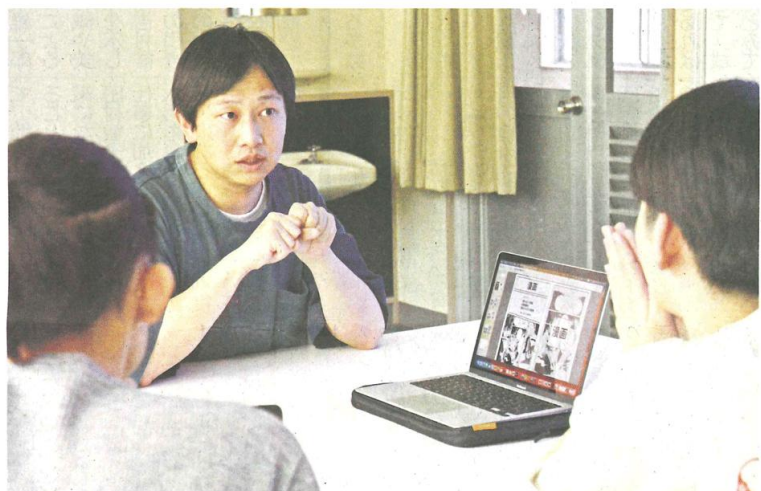
八戸工業大感性デザイン学部感性デザイン学科の戴研究室は、今年4月に開設されたばかり。青森県内では珍しい「アートマネジメント」に関する研究を行っている。アートマネジメントは直訳すれば「芸術経営」。文化庁の資料によれば「文化の作り手と受け手をつなぐ役割を担うもの」であり、「公演や作品等の企画・制作、資金の獲得など、芸術を発展させるために不可欠」とされている。

戴助教は中国湖南省が大切に考えようことになる。出身、国立の映画専門大学、北京電影学院の広告監督専攻卒業後、東京芸術大学大学院映像研究科映画専攻修士課程に進むため、2015年に来日した。映像作家志望だったが、イラン国際映画祭への招聘、参加をきっかけに「映画を通じて、人と人がつながるのことに関心を寄せる。

動画配信サービスの充実により、どこでも好きな時間に映画を楽しめる現代において、映画館は存在意義を問われている。「同じ空間で同じスクリーンを見て、気持ちを共有することが映画館、映画祭の一番の意義」と話し、恒常的な映像文化の拠点を形成する重要性を強調する。地域の映画上映団体からの相談も受けており、専門家の立場から助言や調整していくほか、学生と共にプロジェクトを立ち上げるなど、映画、映像を媒介にした地域活性化についても方法を模索している。



映画製作の現場について学生に説明する戴周杰助教



学生作品について意見を交わす戴周杰助教

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。